荒野を歩け

名も無き二等水兵

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

我慢できずに書いてしまった。後悔はしていない。

艦これの提督と叢雲がドルフロ世界に迷い込む話。「ウミのアサガオ」（前に投稿している奴）とは別の世界線の話と捉えていただければ。

目次

第1話 …… 1
第二話 …… 11
第3話 …… 18

第1話

何処かも知れぬ寂れた飛行場。銃声が鳴り響き、噴煙のような硝煙が辺り一帯に立ち込める。そこは紛れもない「戦場」だった。

そして、生死の境界線上にあるこの地に不釣り合いな二人が崩れかけた壁に身を潜めている。一人は、白い軍服を着た、やや小柄な男。一片の汚れもなかったその服は、煤で黒ずんでしまっている。この非常事態でも軍帽を取らないあたり、軍人としての威厳を感じさせる。

もう一人は、男の両肩程度の身長を有する女性。白と黒、それに藍をベースにした制服に赤いネクタイ。黒いタイツに両手にはグローブ。ここだけを見れば変わった容姿の女の子、といった感じか。しかし、彼女を非人間たらしめるものが、背部に存在する兵装だ。左右に砲塔が設置され、碇が尾のように張り付いている。そんな男女は、同時にこう呟いた。

「「どうしてこうなった（のかしら）」」二人はこれまでの記憶を思い返す。

ーーーー

「それでは、提督、叢雲さん、いってらっしゃい。」

「叢雲ちゃん、お土産一杯買ってきてね!!」大淀と吹雪が飛行場まで見送りに来てくれる。

「任せなさい、吹雪。大淀も鎮守府を頼んだわ。」叢雲が胸をポンと叩いて言う。

今日から5泊7日で私と叢雲はヨーロッパへ旅行へ行く。二人きりのハネムーン。吹雪からお土産リストを受け取り、叢雲と飛行機ーセスナ：サイテーション・ラティチュードーに乗り込む。これは海軍が今回の旅行のために貸してくれたものだ（パイロット付き）。

シートベルトを着けると、彼女はこう言った。

「戦いが終わって、やっとあんたと本当の夫婦として過ごせるのね。」左手の薬指には銀に光る指輪がはめられている。

私は7年前に叢雲と共にこの鎮守府に着任した。提督の適性があるというだけで地元の商社から海軍に引き抜かれたため、戦術について右も左も分からなかった。叢雲はそんな私を怒鳴りながらも、決して見捨てずに着いてきてくれ、あと一歩のところで深海棲艦に逃げられた苛立ちも、一瞬の油断から仲間を沈めてしまった後悔も、海域を解放した喜びも共に分かち合ってきた。艦娘の数が増え、鎮守府の規模が大きくなり、人

類と深海棲艦の勢力が逆転していくにつれ、彼女は「一人の駆逐艦」から「かけがえのない相棒」へと昇華していった。そして、私は叢雲とケッコンカッコカリの儀式を行い、今からちょうど半年前に深海棲艦の撃滅宣言が発表された。

終戦後、全艦娘は解体され、人間社会へと溶け込んでいった。学校に通う者、企業に就職する者そして海軍に留まり、日本の防衛を担う者。私は結局海軍に留まり、妻の叢雲と一緒に鎮守府で生活をしている。政策により、ケッコンカッコカリをした提督と艦娘は法律上の夫婦とみなされることになった。私は叢雲としかケッコンをしなかったが、艦娘全員とケッコンした友人のAは艦娘達の重い愛に苦しんでいるという。自業自得か。

「まずはイタリアでピザとパスタを食べるわ。あっ、でもジェラートも捨てがたいわね。」旅行のハンドブックを見ながら、彼女は目を輝かせる。

「がっつかなくても食べ物は逃げないよ。それよりも、」私は優しい声で語り掛ける。

「私たちは今まで沢山のものを失ってきた。だから、今回の旅行、いやこれから二人で大切なものを沢山見つけていこう。」

「そうね。」彼女は微笑む。愛しのお嫁さんは可愛いなぁ。

『これより当航空機は離陸します。お客様はシートベルトの着用をお願いします・・・』

イタリアについたらまずはジェラートだろう。

ーーーーー

「で、気が付いたらここに倒れていたと。」「そうだな。」

「よくも私のピザを盗んでくれて、許さないわ！酸素魚雷を喰らわせるわよ!!」

「叢雲、声が大きい！敵が来たらどうするんだ。それに、陸じゃ魚雷は使えないだろう。」

「そ、そうね。ごめんなさせつめいできないたとしてもその格好じゃ街を歩けない。まあ、こんな寂れた場所がイタリアと言われたら疑うしかないが・・・」彼女の艤装を見て言う。おかしい。確か艤装は終戦と同時に解体したはずだ。

「飛行機に艤装は積んでいなかったから、私に装着されているのはおかしいわね。」

「それに、さっきから銃声が聞こえてくる。紛争の類は深海棲艦の出現と同時に一切無くなったから、これもおかしいな。もしかするとだ。」

「もしかすると、って何よ。」

「私たちは今までいた世界でない何処かに飛ばされたのかもしれない」

「あんた、アニメの見過ぎよ。夕張に影響されたのかしら。」叢雲は私の推理を無下にする。失礼な。

「でもそのように考えなければ一連の現象は説明できないだろう。」

「私、ああいうアニメ好きじゃないわ。何の取り柄もない平凡な俺だったが、異世界へ転移して美人の女性のハーレムを築くって馬鹿みたい。リアリティの欠片も無いわね。」
「全部が全部そのような展開じゃないぞ。鎮守府に帰ったら異世界アニメ鑑賞会だ。」
「はいはい。」などと不毛な会話を繰り広げていると、
ガタンッと何者かが動いた音が聞こえた。「!?」
「叢雲、戦闘準備に入れ。」「言われなくても分かってるわ。砲撃戦、用意！」叢雲の合図とともに艤装が稼働する。１２．７ｃｍ連装高角砲（後期型）が妖精たちによって動き出す。
　私が艤装展開を確認したその瞬間、背後から銃のようなもので突かれる。
「動かないで。反抗するなら、直ちに撃つ。」か弱い、女性の声。
「!!司令官に危害を加えるようなら、私も貴方を撃つわ。」叢雲は高角砲の標準を女性に合わせる。
「何が何だか分からないが、私たちは君に危害を加えるつもりはない。叢雲、高角砲の照準を下げろ。」
「でっ、でももし司令官が殺されたら私・・・」叢雲は心配そうに言う。
「見たところ、誰かに追われているからこうして警戒しているのだろう。そうだろ？お嬢さん。」

「・・・・・・はい。」

「別に君を見つけて誰かに通報するようなことはない。そもそもそんな機械は持っていない。何なら確認してみてくれ。」

「分かった。」彼女はそう言って、銃を下ろし正面に立つ。黒髪に通信機とみられるカチューシャをし、首にバンダナ、腰のあたりに上着を巻き付けている。衣服といったものを殆ど着けていない。そして左手に白い機関銃。叢雲と同じ、艦娘のような無機質さをそこはかとなく漂わせている。彼女は私の衣服、持ち物全てを確認してこう言った。

「先程の無礼を詫びます。私はＭ４Ａ１．今「鉄血」に追われています。助けてください。」

「なるほど。ここの事情は概ね把握した。」自らをＭ４Ａ１と呼ぶ少女の説明を聞き終えて私は言った。

　第三次世界大戦とそれに伴う国家の衰退、民間軍事会社（ＰＭＣ）と戦術人形の台頭、人形を製造する鉄血公造株式会社の崩壊と人形の暴走。全てが私たちがいた世界と異なっている。

「どうだ叢雲、私の予想は当たっていたぞ。」「何呑気なこと言ってんのよ。ここはグリフィンと鉄血の衝突地なのよ!?」叢雲があきれて言う。

鉄血はグリフォンが製造したＭ４Ａ１を捕獲するため、各地に人形を配置している。そしてこの地域には、「処刑人」という通常の人形よりも戦闘能力が高い人形が配置されているという。何故、Ｍ４Ａ１が追われているのかについては教えてくれなかった。無理もない。

「つまり、鉄血の人形が私たちの言う深海棲艦で、その「処刑人」が鬼又は姫級っていうわけね。」叢雲の説明は分かりやすい。

「処刑人には無闇に近づかないほうがよいかと。現在グリフィンからの援護部隊が向かっているらしいので、そちらと合流できれば「叢雲、処刑人を沈めてこい。」いいっ、って何を言っているのですか貴方は!!!」Ｍ４Ａ１が叫ぶ。

「援護部隊が処刑人と遭遇している可能性がある。それに、奴を倒してしまえばこの場は安泰だろう。いけるな、叢雲。」

「司令官の命令ならそれに従うまでよ。処刑人の情報を寄越しなさい。」

「・・・・・」唖然に取られるＭ４Ａ１。「これが処刑人の写真です。」叢雲に差し出す。

「如何にも深海棲艦みたいな恰好ね。まあいいわ。貴方は司令官の警護を頼むわね。」そう言って、叢雲は飛行場を出て行った。

「なぜあんなに自信が御有りなのでしょうか・・・」Ｍ４Ａ１が呟く。

「大丈夫だよ。彼女、うちの鎮守府で一番強いから。それに、

自分が負けないことは彼女が一番分かっている。」

ーーーー

「所詮はグリフィンの人形さんたち。大したことないわね。」「クッ・・・」

膝まづく私を見下ろし、「処刑人」が侮蔑する。既に仲間は瀕死の重傷を負い、撤退している。私もあと一発喰らえばお終いだ。強すぎる。

「吐きなさい。Ｍ４Ａ１の居場所は何処？」

「例え知っていてもお前に教える筋合いは無い」そう言って機関短銃を構える。

「小癪な!!」が、処刑人がハンドガンで短銃を払う。直後、鳩尾に強い衝撃。

「がふっ」「私をあまり怒らせない方がいい。もう一度だけ言う。Ｍ４Ａ１は何処だ。」

「・・・知らない」

「そう、ならここで死になさい。」額にハンドガンが突き付けられる。

（御免なさい、指揮官。一〇〇式は此処までです。）死を覚悟する。

「主砲、撃ち方初め！てぇーーーーー！」ドォウンッ重い轟音が響き、同時に処刑人の体が吹き飛ばされる。

「ガァァァァァぁぁッ!!!!」悲鳴を上げ処刑人がのたうち回る。
「馬鹿な、他にグリフィンの人形はいなかったはず！何故だ何故だ何故だ！」
「戦場においてイレギュラーはつきものよ。」何者かが煙の中から言う。
「お前は誰だ!!殺してやる!!!」処刑人は大剣を構える。が、直ぐに蹴り飛ばされ、砲塔の先端が頭に向けられる。それは、ついさっきまで私が処刑人にされたものだった。
「名乗る筋合いは無いけれど、冥途の土産に教えてあげる。私は、

特型駆逐艦、吹雪型５番艦叢雲よ。海の底に消えろッ!!」

そう宣言し、彼女は轟音と共に砲撃した。煙が止んだ後、処刑人がいた場所には塵一つ残らなかった。

「助けて下さって、本当にありがとうございます。」
「いいのよ。私は司令官の命令に従っただけだから。」
「司令官？貴方にも指揮官がいるのですか？」
「えっと、それは・・・・」叢雲といった女性が言い淀む。

「おーい、叢雲ーーーーーー!大丈夫かーーーーーーーー!」遠くから人影が見える。１人はＭ４Ａ１。もう一人は・・・と確認する前に体が動き出す。間違いない、あの方は。
「指揮官!!どこに行っていたのですか!本当に寂しかったのに・・・ぐすっ」なりふり構わず、私は指揮官を抱きしめました。
ーーーー
叢雲を見つけて会いに行こうとしたら、謎の女の子が私に抱き着いてくる。これが分からない。
あぁっ、叢雲。これは違う。誤解だ。そんなジト目を向けないでくれ。

第二話

「それにしても、ホントに前の指揮官さまとそっくりなんですね、貴方は。」
　先程までいた前線から少し離れたグリフォンの前線基地。そこの指揮官室で、部隊幕僚の女性ーカリーナ、というらしいーは私に向かって言う。
「・・・この方は正真正銘、私たちの指揮官です」左横に陣取り、私の側を絶対に離れないとする女の子は、一〇〇式機関短銃、通称一〇〇式だ。
　この世界では、人間に代わって戦術人形という自律人形が兵士として利用されているが、グリフォンが利用している戦術人形は皆第三次世界大戦までに世界各国が使用していた兵器、とりわけ銃器をモチーフにしている。例えば一〇〇式は、第二次世界大戦において旧日本陸軍が使用していた短機関銃である。
「ちょっとあンた、さっきから司令官にべったりし過ぎよ！時間と場所を弁えなさい！」
右後方部にいた叢雲が吠える。
「まぁ、いいじゃないか。カリーナさん、前の指揮官とはどういう意味ですか。」
「カリーナで大丈夫です。そうですね・・・貴方は戦術人形と指揮官の関係を知っていますか？」

「人体はＭＡ４１から聞きました。戦術人形の戦闘能力は、それを指揮する者との関係の深さに比例すると。」「そうです。戦術人形は、第三次大戦後の戦闘を担う物として製造されましたが、グリフォンが利用している人形は、自身を指揮する者の為に戦闘を行うという特性が付加されています。人形と指揮官の絆が深まれば深まるほど人形の戦闘能力は上昇するのはこのためです。反対に、指揮官と人形との関係が悪化、又は指揮官が居なくなると戦闘能力は大きく低下してしまいます。」

何ともロマンティックな原理であるが、馬鹿にはできない。元の世界にも、ケッコンカッコカリという制度があるのだから。

「ですから、戦術人形にとって、指揮官という存在はとても重要なのです。機能的にも、精神的にも。ですが、部隊の数に対して、指揮官の数が足りていないのが現状です。大戦と鉄血の侵攻で人口が減少しているのに加えて、人形を指揮する素質の問題があります。前の指揮官さまは1年振りに着任したグリフォンの人形指揮官で、能力も申し分なかったのですが・・・

３日前に、この基地から忽然と姿を消してしまったのです。衣服や持ち物諸共。指揮官室には、備え付けの家具以外何もありませんでした。」

「なるほど。」

「初めは、ここの生活の過酷さに耐えかねて逃亡したと考えましたが、直ぐに打ち消しました。あの方は、決して弱音を吐かずに任務を遂行していましたから。それに、持ち物がここから全て無くなるのは不自然すぎます。」

「指揮官の捜索は？」

「人形やヘリコプターを使って捜しましたが、姿や足跡等は見つかりませんでした。それに、ＭＡ４１を保護するという任務の途中でしたから。仕方なくＡＷＯＬ扱いにしましたが、人形の士気の低下はひどいものでした。特にそこの一〇〇式は、指揮官さまの着任当初から副官としてずっとそばにいましたから。あっ、いや別に貴方を非難しているわけではありませんよ？」そう言うカリーナの語気は、どこか強まっている気がした。

どうやって、そして何故ここの指揮官が姿を消したのかは分からない。だが、前線において敵前逃亡することは重罪であり、何より仲間を裏切る行為だ。ここの人形たちを艦娘達に置き換える。彼女たちが深く悲しみ、絶望する様子は容易に想像できた。

最早考えるまでもない。私は帽子を取り、深く頭を下げた。

「本当にごめんなさい。私は、君たちの思いを踏みにじり、悲しませてしまった。許してほしいとは思わない。私は純粋に、君たちに謝りたい。」

「ほんとうにさみしかったんですから、、、、ばか」カリーナは私に体を預け、声を上げて泣き出した。制服が涙と鼻水でぐちゃぐちゃになってしまっているが、それは些細なことだ。

「もう、私から離れないでください・一〇〇式は頑張りますから」

「今日は許してあげる」

一〇〇式と叢雲を横目に、私は静かに決心した。

ーーーー

結局、この基地の戦術人形たち（５０体）全員にショートケーキを送ることでカリーナに許してもらった。カリーナは現在叢雲と一緒に製造工場にいる。銃器ではない軍艦を模した彼女のデータを確認するためだ。そして私は、現在司令部にてグリフォンの社長のクルーガーさん、上級代行官のヘリアンさんそしてＩ．Ｏ．Ｐ社のペルシカさんと電話会議を行っている。

「――――と言ったか。カリーナによると、指揮官の素質はあるようだが」とヘリアンさん。

会議の前に、人形を指揮するシミュレーションを行った。陣地の占領の仕組みは理解するのに手間取ったが、こちらの損失なく敵の司令部を占領できた。深海棲艦との戦い

と大きく異なるのは、人形部隊をこちらの指示で自由に動かせること、戦闘中も人形に対して移動、撤退等の指示を下せることだ。行動の自由が広い反面、一つの行動の重要性はあちらの比ではない。

「ここに来るまでは戦術人形と同じ少女達を指揮し、戦ってきました。先のシミュレーションはその戦法を応用しただけです。」既に3人には、自分が別の世界から来たこと、艦娘と深海棲艦の存在を説明している。

「君の説明は正直信用しがたいが、側にいた女性、ムラクモと言ったか。彼女がいる限り、信じざるを得ない。」腕を組むクルーガーさん。漆黒のダークスーツに浮き出るほどの筋肉を見て、絶対に逆らってはいけないことを確信した。

「ムラクモは確か第二次大戦の時の、ジャパンのデストロイヤーだね。バトルシップが戦術人形となった例は私も知らない。」とペルシカさん。

「見たところ、幾度もの戦線を潜り抜けてきた目をしているな。青年よ、君は人形たちと生死を共にする覚悟はあるか。もう後戻りはできないぞ。」クルーガーさんが最後の意思確認をする。元より返事は決まっている。

「私は、彼女たちと共にこの前線を生き抜きます。」

「歓迎しよう。ようこそグリフォンへ。」

「結果が全てだ。頼むぞ、指揮官。」
「後でムラクモを確認させてよね。」

ーーーー

「あっ、指揮官さま～、ムラクモちゃんのデータが取れましたよ！」
会議を終え、廊下を歩いていると、カリーナが書類を持って駆け寄ってくる。顔にはもう、涙の筋は残っていない。
「そうですか。ありがとうございます。」
「いえいえ。それと、敬語はやめてくださいね。指揮官さまはもう、私たちの指揮官さまですから。」
「そうか、分かった。ちょっと書類を見させてもらう。」書類は2枚あり、一枚目が叢雲のデータ、二枚目が比較用の一〇〇式のデータだ。まず一〇〇式のものを見る。

名前：一〇〇式
機種：サブマシンガン
レベル：４６
ＨＰ：４６２
火力：１５　命中：８　回避：３３　射速：６２　移動速度：１２
作戦能力：１２９３

なるほど。続いて叢雲のものを見る。

名前：叢雲改二
機種：デストロイヤー
レベル：１６５
ＨＰ：Ｎ／Ａ（３１）
火力：Ｎ／Ａ　命中：３　回避：Ｎ／Ａ　射速：３０　移動速度：３
作戦能力：Ｎ／Ａ

「えっと、Ｎ／Ａは数値が高すぎて計測できないという意味です。」
まぁ、軍艦だし、そうなるよなぁ・・・

第３話

「ふわぁーっ。もう6時か。」ビーッ、ビーッというまるで時限爆弾のカウント音のような目覚まし時計のアラーム音で意識を覚醒させる。ベッドを整え、洗顔をした後グレーのトレーナーに着替える。朝食前の運動をするためだ。この世界の前線基地に指揮官として着任した後も、鎮守府着任後から毎日続けているこの運動を続けている。軍人としての矜持、だろうか。

指揮官室を出て正面玄関へ向かう。戦術人形たちは、非常時を除いて午前７時に全機起動するようにセットされている。カリーナー本人はカリン、と呼んでほしいと言っているがーも同様に7時に起きる。そのため、この時間に起きている者は私と朝食準備をする調理員しかいないだろう。

いや、もう一人いたか。

「遅いわよ、司令官。いや、もう指揮官と呼ぶべきかしら。」腰に手を当てて少し膨れっ面をしている私のパートナーが。

叢雲と一緒にランニング、腕立て伏せ、上体起こし、スクワット等のメニューをこなしていく。この朝の運動は、鎮守府に着任した日の、「そんなヒョロヒョロの体じゃ体力

が持たないわ。明日から毎朝トレーニングね。」という叢雲の言葉から始まった。元々私は軍人ではなく、偶々艦娘司令官の適性検査に引っかかったに過ぎない。一応体力検査も受けたのだが、ギリギリ合格レベルだった。そのような中でのトレーニングだったから、最初は全く体が動かず、筋肉痛が何日も取れなかった。疲れて勤務中に何度も意識が飛び、その度に叢雲にどやされたのも今ではいい思い出である。

「そういえば、I・O・P社での艤装調整はどうなったんだ?」屈伸をしながら、昨日まで出向していた叢雲に話しかける。

「お陰様で、艤装を陸でも使えるようになったわ。ペルシカさんってすごいのね。戦術人形の構造を応用させて艤装を改造したもの。まるで明石みたいだわ。」

叢雲の説明によるとこうだ。元々軍艦であった彼女が陸上で行動するためには、まず艤装本体を陸用に改造する必要があった。艦娘の艤装は、浮力を発生させて艦娘本体を海に浮かせると共に、艦娘を移動させるためのモーターとしての機能を有している。艤装によって艦娘は体力を余計に使うことなく航行し、戦闘を行うことができる。しかし、当然ながら陸には浮力や航行の概念が存在しない。先日のように、艤装を背負って地上を走り回り、敵に向かって砲撃することは可能であるが、艦娘の運動を補助する機能は今の艤装に備わっていないため、行動中に艦娘がバテてしまう。

そこで、ペルシカさんは、叢雲の両足の部分を半自動で移動するように改造した。早

い話が電動ローラースケート化である。両足にモーター駆動のホイールを装着することにより、陸上でもスキーのように移動できるようになった。最も、燃料の消費量は重巡洋艦レベルに悪化したが。

一方、装備については特に改造する必要がなく、また出来なかったためそのままとなった。１２．７連装高角砲（後期型）が２基と、試製６１ｃｍ六連装（酸素）魚雷の発射管。前者は、１分間に４発砲撃できる砲塔が２×２＝４塔搭載されている。当たれば鉄血の人形を一網打尽にできるが、問題は命中とリロード時間である。命中はまだしも、１発撃つために１５秒は必要である。カームショットもびっくりのロマン砲である。

後者の魚雷は一見無用の長物とも思えるのだが、これには深い理由がある。まぁ、それは置いておき。

「そうか、では今日の攻略で叢雲を投入することにしよう。期待してるぞ。」

「任せなさい！あンたもしっかりするのよ。さて、そろそろ宿舎に戻りましょうか。」体操を終え、二人で施設に戻る。

「おはようございます！指揮官さま！ムラクモさんもおはようございます。」

「おはよう、カリーナ（カリン）。」叢雲と食堂で朝食を取っていると、カリーナが朝食

のプレートをテーブルに置きながら挨拶をしてくる。
「今日も運動ですか。お二人とも朝は早いんですね。」
「まぁ、これは日課だから。カリーナもどう?体を動かすと頭がスッキリするけど。」
「・・・遠慮しておきます。朝くらいはゆっくりしたいので～」カリーナがやんわりと断る。彼女はグリフィンの社員としてここの前線基地の業務のほぼ全般を受け持っている。貴重な自由時間に踏み入ることは野暮だろう。因みに叢雲はグリフォンの特殊戦闘社員として採用され、私直属の部下になっている。本人は「人形たちと同じように扱って構わない」と言っているが。
「ところで指揮官、今日の作戦はＭ４　ＳＯＰＭＯＤⅡ及びＡＲ―１５さんの救出ですが、既に編成は決めているのですか。」カリーナが尋ねる。
「第１部隊はそのままだが、第２部隊に叢雲を入れる。攻略は第一部隊がメインで、第二部隊はその補佐だ。今回の出撃で叢雲の能力を知っておきたいからな。」
「いきなり実践投入ですか!?、ムラクモさんはそれでいいのですか。」
「向こうでの調整ばかりで体が鈍っているから、リハビリにはちょうどいいわ。それに、私の体が人形の攻撃にどこまで耐えられるのか知っておかないと。」
「そうですか、あまり無理をしないでくださいね。」「ありがとう、カリン。心配してくれて。」気が付くとカリーナはプレートを片付け、食堂を出て行った。早い。

「そろそろ私たちも行くぞ。」「そうね。私も艤装の確認をするわ。」二人で朝食をかき込み、プレートを返却口へ持っていく。

「作戦概要は以上になります。みなさん何か不明点は。」

午前８時、カリーナが戦闘部隊に対して指示を出す。第２部隊は既に司令部に配置され、第一部隊も既にヘリに乗り込んでいる。

「第１部隊、問題ありません。」リーダーの一〇〇式が静かに、しかし強く返答する。

「第２部隊も大丈夫だよー。しいて言えばムラクモちゃんが前に陣取る理由かな。」こちらはリーダーのスコーピオン。

「ムラクモさんは耐久が非常に高いので、敵の攻撃を防ぐ「壁」になってもらいます。もし重傷を負った場合は、後列に下げてください。」カリーナが返す。

「了解。後は大丈夫かな。」

「分かりました。では、指揮官の号令を以て、作戦を開始させます。指揮官、宜しくお願いします。」

「皆、重傷を負った場合は直ちに退避するように。第２部隊は今回初めて叢雲が加わることで色々勝手が異なるかもしれないが、連携を忘れるな。最後に、単に作戦開始とするのはつまらないから、これを合図にしよう。

皆、暁の地平線に、勝利を刻め！」

ーーーー

「暁の地平線、ね。司令官も中々面白いことを言うじゃない。よし！叢雲、抜錨するわ！着いてらっしゃい！」艤装が体に取り付けられ、エンジンが作動、モーターが稼働する。ギュイイイインという音と共に、叢雲は出撃装置から飛び出していった。

「ちょっ、ちょっと、ムラクモ待ってよ！速過ぎだよ！」スコーピオンと第二部隊（スプリングフィールド、ＭＧ４２，ＡＫ―４７）が慌てて追いかける。

「敵艦、、、じゃなくて敵の人形が見えたわ。人形の数からみて戦闘は避けられそうにないわね。」目を凝らしながら私は後ろの人形たちに言う。

「えっ、ムラクモさん、鉄血の人形が見えるのですか？」スプリングフィールドが尋ねる。

「ええと、赤いスカウターをかけた奴が４体、ヘルメットを纏った奴が６体、黒いスカウターをかけた奴が２体といったかしら。」

「ＲｉｐｐｅｒとＶｅｓｐｉｄはまだしも、Ｊａｅｇｅｒは厄介だね。私とＡＫ―４７はＲｉｐｐｅｒとＶｅｓｐｉｄを、スプリングフィールドさんとＭＧ４２はＪａｅｇｅ

ｒを集中的に狙うように。ムラクモはそうだね、できるだけ敵の攻撃を引き付けておいて。」

「分かったわ。所で、スプリングフィールドだけさん付けなのね。」少し疑問に思ったのでスコーピオンに尋ねる。

「うーん。特に理由はないけど、何か私たちと違って「オトナの女性」って感じしない？」私たち、には私も含まれているのだろう。確かにスプリングフィールドは、芯があり、それでいてどこが母性がある雰囲気を感じさせる戦術人形だ。そして、着目すべきは、藍色の制服でも隠し切れない豊満な胸だろう。巷によると、彼女の水着姿は多くの男性指揮官を虜にしているという。

「・・・貴方とは何処かで分かり合えない部分があるわ。」己の限界を認識され、恨めし気に彼女を見やる。

「私にどこか問題でも？ムラクモさん。」彼女は気づいていないようだ。

「ムラクモ、そろそろ行くよ！構えて！」スコーピオンの言葉で我に返り、慌てて戦闘態勢に入る。しかし、動作が遅れたのか、敵の弾がこちらに飛んでくる。

「しまっ！」弾丸が胸の中央に当たりーーー

コツンッと軽い音が響いた。

「あれ？」音がするまで弾が命中したことに気づいた。弾が何十発とこちらに向かい命中するが、何れもコツコツッと軽い音が鳴るのみである。痛みは全くというほど感じない。

（そりゃ、こちらは軍艦だもの。機銃の攻撃じゃビクともしないわ。）どこか安心し、スコーピオンに指示を出す。「とにかく攻撃はこっちが引き受けるから、援護頼むわよ！」

「よーし、分かった！全員、ムラクモに続けー！」全員が敵の人形に向けて攻撃を行う。

それから先の戦闘はただの殲滅戦だった。私が戦闘区域を走り回り、時には仲間の人形たちの盾となって弾丸を受け、その間に攻撃をさせる。仕留め損ねた人形は、自ら砲撃をする。この戦法が功を奏したのか、こちらの人形の損傷はほぼゼロだった。私も、艤装が少し凹んだくらいで済み結果としては十分満足のいくものだった。第1部隊も先程敵の司令部の占領とＳＯＰＭＯＤⅡの救出を終えたという。

「すごいよ、ムラクモ！」スコーピオンが抱き着いてくる。

「流石指揮官が見込んだ女だな」「尊敬しましゅ」

「ムラクモさん、本日はありがとうございました。基地に帰りましたら、スコーンとコーヒーを御馳走しますね。」

「いえいえ。今日の結果は皆のお陰よ。これからもよろしく頼むわ。」全員と握手を交わす。戦術人形と艦娘、その違いは無いようなものね。

ーーーー

「叢雲よ、失礼するわ。」作戦を終え、フィードバックを各部隊に行った後、私は叢雲を指揮官室に呼び出した。

「来たか。今日の作戦、ご苦労だった。戦闘の感触としてはどうだ。」

「まずまず、といったところかしら。今後は回避能力を強化する必要があるわね。」凛として答える。

「そうか。ところで、叢雲、お前は作戦中、スプリングフィールドとの会話に夢中で敵の攻撃に気づかず、そのまま受けてしまったことがあったな。もし、その攻撃が急所に当たっていたら、どうなっていたと思う。」あえて尋問するように言う。

「うっ、それは・・・おそらく戦闘不能になっていた可能性は否定できないわ。これは私の責任よ。彼女は悪くないわ。」

「いいや。部隊において一人のミスは全体のミスに繋がる。よって、今回の件はスプリングフィールドにも責任があるな。そうだな、今回二人に与える罰は・・・・

叢雲はスコーンとコーヒー抜き。叢雲の分は私が頂く。以上だ。下がっていいぞ。」

「そんな・・・甘いスコーンにほろにがコーヒーが・・・」叢雲は両手を地面に着き、ｏｒｚのポーズで絶望するのであった。